

ISSN 0910-2396

野鳥だより

—北海道—

北海道野鳥だより第147号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成19年3月21日

ミヤコドリ



2006. 4. 29 根室春国岱

撮影者 島田 さやか (札幌市北区)



も く じ

私の探鳥地 (52) 青葉公園 (千歳市)	
千歳市 島崎 康広	2
シマフクロウの近況 札幌大学法学部 早矢仕有子	3
「ヤ」のつく鳥に魅せられて	
茨城県在住 川路 則友	7
白化キレンジャク 札幌市南区 村上 トヨ	9
鵲川河口で希少3種 広 報 部	10
環境調査における「耐震偽装」 美唄市 藤巻 裕蔵	11
探鳥会ほうこく	11
鳥 民 だ よ り	13
宿泊探鳥会のお知らせ	13
探鳥会あんない	14

私の探鳥地 (52) 青葉公園 (千歳市)

千歳市 島崎 康広

青葉公園は、千歳市街地の南東部に位置し、約102ヘクタールの面積に多数の運動施設が整備された総合公園であるにもかかわらず、支笏湖からの森林地帯が繋がっていることもあり、比較的的自然林が保たれ、年間を通して様々な野生の動植物を見ることができます。

青葉公園といってもママチ川や千歳川の公園に接している部分をも含めていますが、樹木は広葉樹も針葉樹もあり、市街地に近く、公園自体が高台となっていて、また千歳市の地理的特徴で、春と秋の渡りには中継地にもなり、年間を通して多くの野鳥が見られます。そのため、公園に接してある千歳神社の入口の看板には千歳市内で確認された野鳥は110種と書かれているのですが、この10年間で万年初心者の域を出ない私が公園に接しているママチ川と千歳川を含めて約80種類の野鳥を確認しています（上空通過のマガンやヒシクイも含んでいます）。

見られる野鳥の中心は、森林の野鳥になると思いますが、4月中旬～5月中旬には、駐車場として利用している市立図書館前の駐車場に着いたとたんにクロツグミ、アオジ、オオルリ等の澄んだ歌声が聞こえてきます。歌声に押されるように少し中に入ると、アカハラ、コムドリや青葉公園に多いと言われているキビタキが見られ、千歳川河畔に降りれば、キセキレイやカワセミに出会えます。

逆に、マイナス20度になる厳冬期には、カラ類やキツツキ類が中心になりますが、レンジャクやクマガラにも出会えるかもしれませんし、上空をオジロワシやオオワシが舞っていることもあります。千歳川では、マガモの他にキンクロハジロ、ホオジロガモ、カワアイサ、ミコアイサ、千歳市の鳥になっているヤマセミなどが見られます。

また、冬には歩くスキーのコースが出来、競技練習の邪魔にならないように気をつけての鳥見になりますが、一番長い8キロコースは、この時期にしか入ることが出来ない私有地の森林にも入ることが出来、野鳥の種類が増えます。

春と秋は、渡りの途中のクロジ、シロハラやエゾビタキ等に出会える可能性があり、上空ではオオハクチョウ、ヒシクイ等が見られるというように、真夏の緑の生い茂る頃以外は、1年を通して野鳥を楽しめます。

私がいつも歩くコースは、駐車場から千歳神社周辺やママチ川周辺を歩き、北側の散策路を歩き、途中、公園から「おはよう橋」に降り、千歳川の河畔で野鳥を楽しみ、そして公園内に戻り、時間によっては西に向かって高速道路まで歩き、南側の散策路から駐車場に戻るか、おはよう橋からすぐに公園内を縦断して南側の散策路から駐車場に戻ります。

1時間から3時間のコースになりますが、時間がないときには、公園の入口付近を30分歩くだけでも十分に楽しめます。また、穴場としては市内から支笏湖へ向かう途中の「てんぐの蔵」というおそば屋さんから左に入ると林東公園という、昔、市民の方が自然保護を条件に市に寄付された土地があり、千歳川を挟んで反対側が青葉公園になっていることも影響しているのか、歩いても30分程の公園ですが、歩いて損はないと思います。近年、周辺で越冬したと思われるアオジやホオジロが見られています。

住宅街のすぐ前に豊富な自然が残されているのは、誇りに思いますが、支笏湖へ続く森林や千歳川の環境が保たれているからこそだと思うので、いつまでも季節に応じた野鳥を楽しませて欲しいと願います。

シマフクロウの近況

札幌大学法学部 早矢仕 有子

日本では1971年に絶滅したコウノトリが、一昨年、最後の生息地だった兵庫県豊岡市の空に舞い上がりました。ロシアや中国から連れてきた個体を飼育施設で増やすことに成功し、とうとう野外への放鳥にこぎつけることができたのです。早ければ今年にも野外でヒナが誕生するかもしれません。同じく日本で一度絶滅したトキは、佐渡のトキ保護センターで中国から連れてこられた2羽が1999年に繁殖に成功したのを皮切りに、今では100羽近くにまで増え、野外への放鳥も計画されています。このようにいったん絶滅した生物種を過去の生息地に放すことを生物学用語で「再導入」といいます。彼らが野生で過ごしていた時代の記憶がない私のような世代にとっては、外国産個体を持ち込み野外へ放す行為は、外来種の侵入と大差ない気がしてしまうのですが、原風景の中に彼らの棲む里山風景が残っている人たちにはとても懐かしく嬉しいことなのかもしれません。もし、再導入が免罪符として利用され、我々がトキやコウノトリを絶滅させてしまった過去の過ちを忘れてしまうなら、その再導入は百害あって一利無しですが、日本の里山の象徴として今度こそ彼らを大切にしようとする機運が高まるならば、それは大いに意義のあることでしょう。

彼らとは異なり、絶滅の一步手前で踏みとどまり奇跡の復活をとげた鳥類種に、日本で繁殖する唯一のツル、タンチョウがいます。北海道では昨年、個体数が1,000羽を超えたことが話題となりました。かつて20世紀初頭には、絶滅したとまで思われていたこのツルは、今では冬に給餌場に出かけさえすれば誰でもその姿を見ることができます。熱心なバードウォッチャーでなくても、よほどのひねくれ者でなければ、あの凜とした美しさに惹き付けられない人はいないでしょう。先日、久しぶりにタンチョウの給餌場を訪れる機会がありましたが、改めて、彼らがこの国から永遠に姿を消さなかった幸運と関係者の努力に感謝の気持ちがこみ上げました。

コウノトリやトキ、さらにはタンチョウの最近の吉報は繰り返しメディアで伝えられましたから、おそらく多くの人の記憶に残っているのではないのでしょうか。

一方、北海道にはタンチョウよりも絶滅の危険性が高いシマフクロウが棲んでいます。その個体数はタンチョウの八分の一ほどにすぎません。地味で夜行性で人目に付かないこのフクロウに関しては、とりたてて大きな吉報もなく、その保護の歩みもあまり人目に触れていないかもしれません。派手な話題のないシマフクロウですが、その保護と個体群の現状を、簡単に紹介してみたいと思います。

かつてこのフクロウは、函館や札幌、帯広等、現在の主

要都市にも棲んでいました。札幌では北大キャンパスに昭和20年代まで棲んでいたという記録があり、最後の(?)1羽の剥製が大学博物館に保管されています。老熟したハルニレの大木は今でも「エルムの学園」の象徴ですが、60年ほど前まではその梢でシマフクロウのつがいが鳴き交わしていたはずですが、もちろん今やその姿は、北大はもちろん、札幌近郊でも見ることはできません。ひとつがいで15平方キロもの豊かな河畔林を縄張りとし、食欲旺盛な秋にはひと晩で1kgもの魚を狩る彼らにとって、今の札幌は不毛の土地にしか見えないでしょう。それは帯広や函館も同様です。主食の魚に事欠かず、子育てをすることができる大きな洞を持つ広葉樹の大木に不自由しないというのが彼らの生息にとって最低限の条件です。

しかし、現在の北海道ではそれは贅沢すぎる望みであるようです。今ではシマフクロウの分布は大幅に縮小してしまい、大雑把に言えば、北海道を縦横に4分割した右下部分、すなわち道東域だけでひっそりと暮らしています。



シマフクロウ (成鳥オス)

だからといって道東域が必ずしもシマフクロウの生息に十分な環境を提供しているわけではありません。現在のシマフクロウの多くは、給餌と巣箱を中心とした人為的な保護に依存して暮らしています。国の事業としてシマフクロウの保護が始まってから20年が経ち、これまでに設置された巣箱は合計で200個を超えています。もちろん新旧交代の掛け替えも含まれていますが、それにしてもひとつがいの行動圏に複数の巣箱が提供されていることになります。巣箱といっても、体長70cm、翼開長180cm、体重4kgの鳥が使うのですから、並大抵の大きさではありません。ほぼドラム缶大の代物です。これを山中へ運び木の幹に架けるのはなかなかの重労働です。たいていの場合、この努力は

報われます。大きな洞を持った広葉樹の大木が不足しているご時世ですから、彼らは喜んで巣箱を子育ての場として受け入れます。

ただし、繁殖より大事なのはまず親鳥が生存すること。そこで、人為給餌が保護事業の大きな柱になっています。鳥への給餌というと、まず思い浮かぶのは庭の餌台かもしれませんが、ここでの給餌は相当かけ離れています。主食の魚を生きのまま与えるため、まずは池が必要です。養魚場の隅や川の一部に囲いを作り魚を放します。冬季に凍らないように湧水あるいは温泉を利用するか、ポンプで水を動かし続けるか、それぞれの生息地に適した方法を用います。現在、9つがいの生息地で冬季を中心に給餌事業が実施されています。まずは「食」を保証することで成鳥の生存を確実にし、十分な余裕ができたなら次は子育てに専念してもらおうという方策です。

「食」と「住」が満たされれば、とりあえず生き物はなんとかなるものです。図をご覧ください。これは北海道で年ごとに巣立ちが確認されたヒナの数の推移です。事業開始当時は、関わる人の数も少なく十分に調査が行き渡らなかったこともあり、確認できた巣立ちヒナ数は極端に少ないのですが、それにしても近年は毎年20羽前後のヒナが、多くは巣箱から巣立っています。ひとつがいが一度に産む卵の数は1～2個ですから、年に10つがいが以上がヒナを巣立たせていることになります。

シマフクロウは長寿です。動物園では42歳まで生きた個体がいまいました。しかも、縄張りとはパートナーをとっても大切にしますので、一度縄張りを確立しつがいを形成したらそこでは20年以上にわたってヒナが生産される可能性が高いのです。ですから各つがいを手厚く保護することで、ゆっくりですが確実に個体数が増えていくはずですが、そのため、給餌と巣箱はこれからも保護の中心として継続していくことになるでしょう。

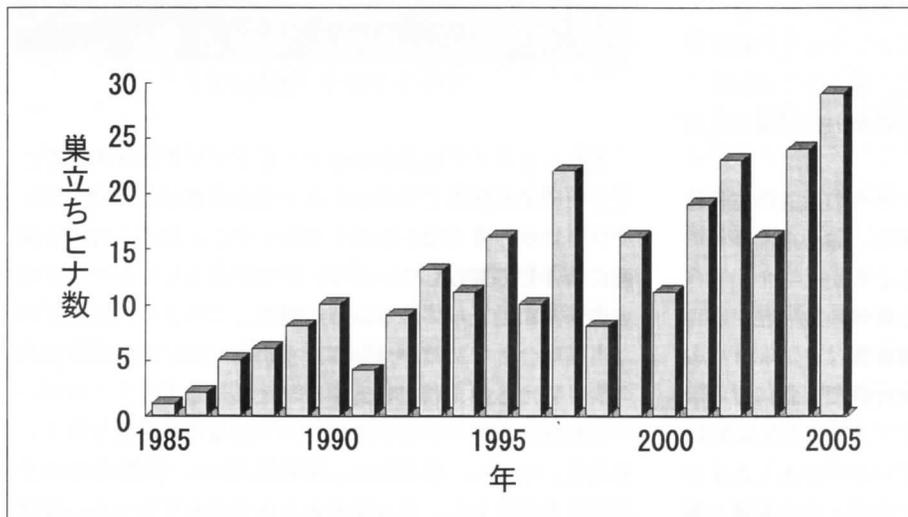
このような話をすると必ず、「じゃあもっと給餌箇所を



巣箱設置

増やせばシマフクロウは増えるのではないのか？」との御意見を頂戴します。ところが、池を作り給餌を継続するのは、想像以上にたいへんなことです。冬期間の給餌が大切なのですから、池が凍ってしまっは話になりません。秋には大量の落ち葉が流れ込み、池が詰まってしまうことも稀ではありません。池には常に泥が流れ込み堆積しますから、それを定期的に除去せねばなりません。池を川の近くに作れば、春の融雪や夏の台風時の大水で魚が全部流され池自体が破壊されることもあります。さらに、池に魚を入れれば当然、やって来るのはシマフクロウだけではなく、春から秋はアオサギが飛来し、キツネは年中やって来ます。中でも一番許せないのは北米原産の外来種、ミンク

です。外来生物法で「特定外来生物」に指定されている彼らは、獲物をその日食べる分だけではなく、捕れるだけ捕って蓄える習性があります。一匹のミンクが居着いただけで池の魚はみるみる減っていきます。池田清彦氏の「外来生物事典」には、ミンクの被害はたいしたことはない、というような記述がありますが、シマフクロウの立場からすれば大加害者です。我々は「特定外来生物」を養うために給餌しているわけではないのに、シマフクロウの何倍も何十倍も魚を捕ってしまうのですから。



シマフクロウ巣立ちヒナ数の20年間の推移
「Hayashi & Nishida-Umehara (2001) に環境省資料より加筆」

そして何より困ったことに、シマフクロウは池に魚を狙って訪れる誰よりも、狩りが下手です。池のそばに来て樹上からじ〜っと魚を狙っている間に次々とミンクは魚をくわえて持ち去ってしまいます。

このような様々な事態がおこるため、給餌池を維持管理するには人手が必要です。しかし、そのために人が雇えるわけではありませんし、魚代だけに限っても国の事業費は不足しています。各つがいにはひと冬300kgほどの魚を与えるのに十分なお金すらなかなか提供されません。

そして、これはあり得ない仮定ですが、人力もお金も十分だったとしても、果たして給餌箇所をどんどん増やすことがシマフクロウの保護にとって正しいことなのかという疑問は残ります。

同じことは巣箱にも言えます。巣箱は我々の「家」とは異なり、子育てのためだけに使われるものです。シマフクロウにとっての「住」は、巣だけではありません。巣箱が使われるのは繁殖期だけです。非繁殖期にはけっして巣に入りません。暑い日も大雪の中でも木の枝でじっとしています。しかも彼らの羽色からもわかるとおり、シマフクロウは「目立ちたがり屋」ではありません。昼間は誰にも見つからないよう、ひっそりと身を隠していたいのです。そこで、夏には広葉樹の太い枝で日射しを避け、涼しい風に吹かれています。広葉樹が葉を落とす冬には、常緑針葉樹の幹に寄り添うようにして羽毛をふくらませじっと体温を保っています。また、まだ飛ぶことのできない巣立ちヒナはいったん地上に降りた後、斜めに傾いた木や倒木によじ登って身の安全を確保します。巣立ち後2週間ほどの危険な時期を倒傾木に守ってもらうのです。ですから、シマフクロウの「住」には営巣木だけではなく、多種多様な木々が必要なのです。

「食」生活にしても、給餌池ひとつで彼らの食生活が満たされるわけではありません。年間をとおして給餌池で魚を提供したとしても、春にはカエルをさかんに捕ってヒナに運び、夏にはカモのヒナを襲い、冬には雪上でネズミを追い回します。たとえ給餌に依存し、巣箱で子育てをしているつがいであっても、その縄張りには15平方キロに及びます。季節によって彼らは異なる資源を求め、それらを確保しようとしています。彼らはたくさんものを必要としています。19年間調査をしていますが、彼らが何を求めて遠出をしているのかわからないときがたくさんあります。ただ確実なのは、巣箱と給餌池を与えればよいというものではないということです。複雑な生態系を複雑なまま提供すること、それができれば間違いなくシマフクロウの暮らしは安泰です。

しかし残念ながら、これはたいへん難しいことです。複雑な生態系が消失したからこそシマフクロウはいなくなってしまうました。そして、今なんとか残っている生息地の多くで彼らは自活できていないのです。ならば、失われた生態系を復元すればよいのですが、それは簡単なことでは

ありません。

それでも生態系を復元しようとする試みは徐々に始まっています。北海道ではシマフクロウのほぼ8割が国有林に生息しています。その国有林内では、一部の生息地を「特定動物生息地保護林」に指定し、シマフクロウの生息にとって重要な広葉樹の伐採をこれ以上行わないこととしています。さらに、これまでに伐りすぎた森林を復元しようと、新たな森作りも始めています。一度は針葉樹の造林地に変えた森林を、本来の天然林に復元しようとしているのです。なぜ造林地のままではいけないのか？それは、樹齢も樹高も揃った単一針葉樹種の造林地は、我々の目には「緑の森林」に見えますが、シマフクロウにとっては「木の畑」にすぎないからです。体の大きな彼らにとって樹冠に隙間のない造林地は入り込むことすらできません。小型発信機を付けて彼らの行動を追跡した結果からも、針葉樹の造林地はほとんど利用されていないことがわかっています。ミズナラやシナノキなどの広葉樹とエゾマツやトドマツの針葉樹が混成する本来の森林に復元することができれば、そこはシマフクロウにとって有効な生息環境になるのです。

これは本当に素晴らしい事業ですが、今植えた若木がシマフクロウに緑陰を提供するにはおそらく100年以上の年月が必要でしょう。営巣木を提供するにはさらに100年が必要かもしれません。今、この事業に携わっている人たちは誰もその成果を目にすることはできませんし、果たしてその頃シマフクロウがまだ北海道の森林に棲み続けているのか、誰にもわかりません。それでも生息環境の復元は将来のためにもっとも重要な事業ですし、もっとその意義が高く評価されていいはずですよ。

日本版レッドデータブックでは近い将来もっとも絶滅の危険性が高い「絶滅危惧IA類」に指定されているシマフクロウですが、意外なことに、現生息地で法的に保護が保証されている場所は、知床半島を除いてほとんどありません。1993年にシマフクロウは、「絶滅のおそれのある野生動物種の保全に関する法律（種の保存法）」に基づき「国内希少野生動物種」に指定されています。法の条文では、対象種を保護するために不可欠な生息地を「生息地等保護区」に指定して樹木の伐採や河川の改変を規制することができることと記されていますが、これまでにシマフクロウの生息地が保護区に指定されたことはありません。すなわち、シマフクロウの生息地の多くで、樹木の伐採や河川の改変は未だ規制対象となっていないのです。法的保証のないまま、極端に言えば、そのときの行政担当者の認識次第でシマフクロウの生息環境は良くも悪くもなり得るのが現状です。

さらにもっと困ったことには、生息環境の保全と復元が必要なのは、現生息地だけではなく、将来、すなわち過去の生息地であるという点です。「将来すなわち過去」とは、すなわち、現在までに失われた過去の生息地を再び将来の生息地として復元せねばならない、という意味です。シマ

フクロウほど個体数が乏しい絶滅危惧種を守るためには、現存する個体を維持するだけでなく、個体数を増やすことが急務です。現生息地の質を向上させることは現存する個体にとってきわめて有効な保護策ですが、現存個体が生産している次の世代に新たな生息地を提供するためには、生息可能な場所を増やすことが必須です。いくらたくさん子孫が生まれ親元を旅立っても、皆が棲み場所を見つけられず野垂れ死んでいてはお先真っ暗ですから。そのためには、現在シマフクロウが生息できない場所をも環境復元の対象とせねばなりません。正直なところ、国の保護事業の枠内で現在このような事業が可能とは思えません。現生息地においてすら、森林の保全と復元が必要だと理解を得られるまでに20年近い年月がかかりました。そしていまだに現生息地内の河川を魚の棲める川に復元する事業はまったく手つかずのままです。河川の復元に取りかかるにはさらに20年が必要かもしれません。このような現況では、現在シマフクロウが棲んでいない場所を生息可能地として復元する試みが開始できるのはいったいいつのことになるでしょう？

現在、国の保護事業では、あまり手を加えなくても棲めそうな場所に、人の手でシマフクロウを移動させようとする方策が議論されています。このような人為的な移動はこれまでも数例が行われてきました。生息環境の将来にわたる持続がほぼ保証されている場所へ個体を運び込んだことや、負傷して保護された若鳥を治療・回復後、定着できそうな場所に運んで放鳥したりあるいは親元へ戻して放鳥したこともあります。中でももっとも定着の成功が見込まれるのは、雌雄いずれかの成鳥が単独で定着している生息地に異性のパートナー候補を運び込むものです。1羽ではあっても既に定着して生存しているのですから、シマフクロウの生存に必要な条件が整っているはずで、しかも、通常、成熟した生物は繁殖する機会を求めています。好きで1羽で暮らしているのではなく、異性に巡り会えないから単独で生活しているはずなのです。そこへ異性を連れて行けばお互い喜んでくれるのではないかとという算段です。

最近、その人為的移動の機会が新たに生まれました。1羽のメスが単独で暮らしている生息地が見つかったのです。そこはかつての生息域の範囲内ではありますが、ほかの現生息地とは100kmほど距離が離れているため、なかなかオスが入り込むことが期待できません。このような場合、飼育下に野外復帰への訓練を受けたオス個体がいれば、彼を連れて行ってお見合いを試す価値はあるでしょう。もし縁組みが成功して次世代が生まれたら、若い個体が旅立ち、現生息地との間に架け橋を築いてくれる可能性があります。ほかの生息地から離れて孤立している一人暮らしの個体がないように、人が手を貸すのは有効な保護策でしょう。

ただし、人為的移動や、巣箱・給餌はまったくの対症療法であることを忘れてはなりません。シマフクロウの保護策は、給餌と巣箱という対症療法を中心に据えて20年間が



シマフクロウのための森づくり
(針葉樹間伐後に広葉樹を植える)

経過しました。そこでまた次の対症療法である人為的移動を方策の中心に加えるとしたら、保護の本当の成功はさらに先延ばしにされることになります。対症療法はあくまでも補助的あるいは短期の緊急避難的対策であるべきなのに、これまでの20年に加えてさらにこれからの何年か何十年かが、対症療法に費やされていくのでしょうか？

人為的に個体を移動させることで、つがい形成を促進する事業を行う折には、同時に移動先の生息地と現生息地を結ぶ「回廊」を作る事業を行うべきです。とくに単独個体の生息地は他の生息地からの移動が困難なために隔離されている可能性が高いでしょうから、現生息地との間に移動経路を作ることで、将来生まれた子供が安全に他の生息地へ分散することが容易になるでしょう。シマフクロウにとっての移動経路とは「川沿いの森林」です。川で餌を採り、水際の森林で休みながら若い個体が冒険の旅を満喫することができるになれば、親元から離れた若鳥の生存率も上昇するでしょう。現在、シマフクロウの死因で一位を占めているのは、把握できている限りでは交通事故なのです。主に巻き込まれているのは親元から旅立つ前後の若鳥です。彼らは車の危険を知らないまま川沿いに移動を開始し、道路を横切って低空で飛行したり、あるいは雨の日に路上に降りてカエルを捕ろうとして轢かれてしまいます。川と道路の間に緩衝地帯を設けるためにも、広い幅で森林を保全・復元することはとても有効です。

とりあえずは対症療法の継続と発展もやむを得ないでしょうが、同時に、いつも後回しにされてきた生息地復元を長期的計画に基づいて実施していくことが不可欠です。

タンチョウが北海道の湿原生態系の「象徴種」だとしたら、シマフクロウは河川と森林生態系を結ぶ「象徴種」です。今はいずれも人からの給餌に頼って命脈を繋いでいますが、本来はそれぞれの生息環境の豊かさを象徴する存在であったはずで、風貌は随分異なりますが、どちらも野生動物特有の威厳と美しさに満ちています。タンチョウとは異なり、今は残念ながらシマフクロウをおおっぴらにご

覧いただける場所はありません。シマフクロウを宣伝材料に使って客に見せている宿もありますが、誰かが管理しているわけではありません。あくまでも営利目的の個人が実施していることです。ある生息地では巣立ち後の幼鳥に親鳥が魚を与えようとするたびすさまじい量のストロボが発せられています。その行為が親から子への給餌をさまたげ、子の生存をきわめて困難にしていることを誰もその現場で教えてあげられない現実がとても悲しいです。交通事故ほどわかりやすくありませんが、このような無配慮な行為がゆっくり若い個体を殺していくのです。

いつの日か、誰もが給餌場所で堂々とシマフクロウを見て感動できる日がくればいいと強く思います。タンチョウのように群れることのない鳥ですから、一度に100羽を見ることは不可能ですが、1羽でも2羽でもその姿を見てつがいの鳴き交わりを聞けば、よほどひねくれた人でない限り感動できると思います。この鳥が絶滅の危機を脱してよかった、と安堵して皆がその姿を見ることができるようになることを祈って、ゆっくり地味に保護の努力は継続しています。たぶん飛躍的に現状を打破する瞬間は訪れないでしょうが・・・

「ヤ」のつく鳥に魅せられて

川路 則 友 (茨城県在住)

本誌にヤブサメの生態に関する拙稿を掲載させていただいてから、すでに10年近くが経過している（「ヤブサメのあれこれ」(104):3-10 および「ヤブサメのあれこれ(2)」(107):5-8）。先日、編集長からまた何か新しい知見があったら書いてほしいとの要望を受けた。残念ながら、北海道をあとにして、北の鳥との接触があまりなくなった身では、本誌で紹介するほどの新知見を持ち合わせていない。そこで、道内在住の思い出を中心に随筆風に興味深かった鳥、現在取り扱っている鳥について少し書かせていただくことにした。

ヤブサメという日本産鳥類の中でも最小の部類に入るこの鳥に関して、札幌市羊ヶ丘にある森林総合研究所北海道支所の実験林に約7年間通い詰めたおかげで、おもしろいことが次々明らかになった。ただ、まだまだ追求しなくてはならないことが山ほど残っていたにもかかわらず、突然の異動命令。後ろ髪を引かれる思いで北海道をあとにした。本州の地に赴任して、まずは研究対象鳥類を探すのに苦労した。手始めに、やり残していたヤブサメの生態解明を継続しようとしたが、すでに十分慣れていたと思いきや、本州の急傾斜の森の中ではとてもやすやすと追跡できるものではない。また、手頃な場所では生息密度がかなり低いなどといった欠点ばかり目についた。いまさらながら北海道が野生鳥類の研究地としていかにすばらしかったかということに再認識した。

そういえば羊ヶ丘実験林では、ヤブサメばかりではなく、鳥類の生態に関して様々な興味深い事実に遭遇した。生来ものぐさであり、高いところへ上がることの苦手なところから、地上近くで徘徊するヤブサメの生活をのぞき見することに喜びを見いだして、込み入ったチシマザサの中をかき分けかき分け、地面をはいずり回るように歩いていた私は、そのおかげで、副次的にいろいろな鳥についての興味深い生態を知ることができた。ある樹木の根元にくぼみがあり、その中から、かすかに鳥のヒナの声がする。中をの

ぞいてみると、シジュウカラのヒナが窮屈そうに重なり合っていて、エサをねだっている。これなどは、俗に言う樹洞営巣ではなく、地下営巣ではないか。また、羊ヶ丘の森の中で地上に巣を作るのは、ヤブサメ、コルリ、センダイムシクイ、ヤマシギだけではないことが判明した。なんと、あの典型的な樹上営巣性の鳥と思われていたキジバトも地上に巣を作っていた（写真1）。それも立派にヒナを巣立たせたのを確認できた。また、高いところにばかり巣をつくると思っていたメジロやクロツグミが、ほんの目の高さにあるササに巣をかけていた。密生した丈の高いササは、かえって捕食者からは安全な環境を与えているのではないかと想像させた。また、アオジも丈の低いクマイザサをうまく利用して巣を作っていた。ただ、ササがないところでは確かに地上営巣だった。鳥のしたたかな適応能力にはただただ驚かされるばかりだった。

その当時、広川淳子さんに仕事を手伝ってもらっていたが、あるとき、センダイムシクイとメジロの巣の中で、通常の白い卵に混じった少し大きな赤い卵を見つけたと彼女が知らせてくれた。巣をのぞいてみると、本当に不思議な光景がそこにあった。いくつもの真っ白な卵の中にぽつん



写真1 地面で卵をあたためるキジバト

と、赤色というかチョコレート色の卵がちよこんと置いてある。少し離れて観察すると、親鳥はまったく区別せずに卵を抱いている。残念なことにセンダイムシクイの巢内の赤色卵はそのうち白い卵とともに何者かに食べられてしまったのか消失してしまっただが、メジロの巢にあった卵はその後無事にふ化した。ヒナは、数日でササにかけられた巣をはみ出すほどに大きくなったと思うと、1週間ほどで、その巨大な姿により巣は無惨にも壊され、早くも外に出ってしまった(写真2)。その間、メジロの親は、せっせとえさを運び、あつという間に、非常に大きな黒々とした不気味な幼鳥にまで成長し、やがて巣立っていった。ツツドリの托卵だった。

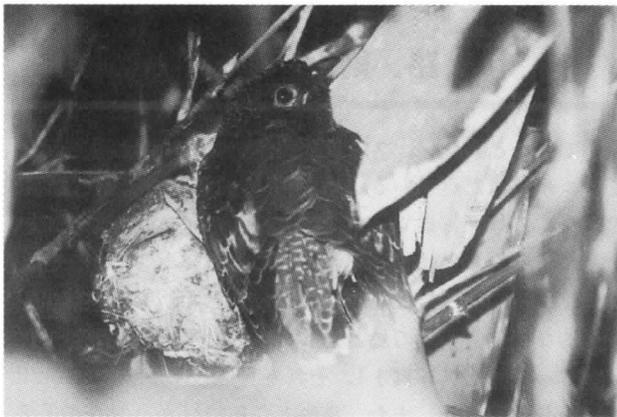


写真2 窮屈なメジロの巣をすぐに飛び出したツツドリのヒナ

このように、私にとって貴重な体験をいろいろさせてもらった羊ヶ丘の森は本当にありがたかった。本州でヤブサメの追跡をあきらめた私は、あてもなくいくつかの調査地候補の森を歩いた。ふと気がつくと、近くで空気のふるえるような異様な音を聞いた。立ち止まると、しばらくしてまた聞こえた。「どどどっ」という地響きのするような深い音質。それが日本固有種のヤマドリのオスが出す「ドラミング」との久しぶりの出会いであった。日本列島とその周辺の鳥々でしか繁殖しない我が国の固有鳥類種は全部で17種ある。ただ、そのほとんどは離島などでの希少な小さな鳥たちであるが、ヤマドリは本州、四国、九州に分布する大型の森林性鳥類である(写真3)。また、昔から人気の高い狩猟鳥としても知られている。ただ、近年狩猟される数がかなり激減したことから、野外での個体数が減少しているのではないかと危惧されている。ヤマドリと言えば、すぐに思い浮かぶのが、万葉集にも含まれた「あしひきのやまどりのおのしだりおのながながしよをひとりかもねむ」という歌である。これは、柿本人麻呂が600年代に残したものとされている。意味としては「あのヤマドリの長い尾のように長い長い夜を恋人と分かれて一人で寝なくてはならないのか。さびしいなあ」というところであろうか。よく経験することだが、森の中にすむ鳥を総称して「山鳥」ということがある。しかし、この歌に現れる「ヤ

マドリ」は、その形容詞(尾のしだり尾)が示すように、長い尾をもつのが特徴の特定の鳥のことである。古代、長い尾をもつ大型の鳥にしっかりと固有名詞の「ヤマドリ」という名を冠して呼び慣れた日本人、気がつくと、その名からは連想できないくらい、身近な鳥でなくなった現実。これはゆゆしき事態ではないか。これはまさに私の残りの研究者人生をかけて精力を傾けても十分価値のある鳥ではないか。そう思った私は、無謀にもこの鳥の生態を追いかけることにした。あつと言う間に10年が経過したが、敵はなかなかしぶとい。いまだに十分なデータが得られていない。悔しいことこのうえもない状態である。

そういえば、北海道でも、よく「ヤマドリ」「ヤマドリ」という言葉を使う方がいるが、これは、通常「エゾライチョウ」を示す。ヤマドリは本来北海道には生息していないからだ。しかし、私は1992年の春に、札幌で不思議な体験をしたことがある。当時勤務していた研究室の隣の室長さんから、「自宅(札幌市里塚地域の団地)の近くで「キジ」が弱ってうずくまっていたので、家に連れて帰ったが、どうしたらいいだろうか?」との相談を受けた。とりあえず持ってきてください、と答え、翌日段ボールに入れて届けられたその「キジ」を見て驚いた。なんと「北海道に生息していないはず」のヤマドリではないか。どういうことかと思ひ、道庁の自然保護課に問い合わせたところ、過去に放鳥した経緯があるという。そこで、過去の放鳥記録を調べてみると、1974年から1987年までの14年間に合計675羽が放鳥されたことになっている(北海道環境科学研究センター「ヤマドリ分布調査報告書」1997年)。しかし、これまで探鳥会や野鳥の調査などで「ヤマドリ」を観察したという例は聞いた覚えがない。結局、保護されたヤマドリは、房総半島、伊豆半島、紀伊半島、中国地方、四国地方の一部に生息する亜種「ウスアカヤマドリ」と思われた。同亜種は、札幌にもっとも近い場所では千歳地域に39羽放鳥された経緯があり、おそらくその子孫がころうじて生き残っていたのであろうということしか考えられなかった。その後、風のたよりに、北海道ではヤマドリは放鳥された後に、定着するまでということ狩猟禁止になっていたらしいが、道南地域の一部では放鳥されたヤマドリをよく見かけるようになってきたので、狩猟者から解禁してほしいとの強い要請があったということを知った。確かに環境省の狩猟統計資料(鳥獣関係統計)を見ると、1995年度に初めて3羽が捕獲され、1996年には0であったが、1997年度に3羽、1998年度に4羽、1999年度と2000年度に、それぞれ1羽が、2001年度に7羽が北海道で捕獲されたことになっている。ヤマドリのオスは大型の美しい鳥で、しかもメスは長年狩猟禁止が続いているので、狩猟でとられたものを「エゾライチョウ」と見間違えることはないと思う。実際に、道南ではある程度定着個体が見られ、捕獲されているのかもしれない。ただ、これほど毎年度捕獲されているということは、ヤマドリのとくにオスは存在感があるので、探鳥会な



写真3 日本固有種ヤマドリのオス

どでもかなり目立つ名物鳥種として話題になっているはずだが...

キジの養殖はかなり容易なために、各地で放鳥が行われ、当初は生息していなかったアメリカ大陸まで広く分布しているほどである。それに対して、ヤマドリは、増殖技術がかなり難しく、1970年代に人工授精技術が普及するまで、ほとんど養殖で増やすことができなかった。ヨーロッパでは、もともと美しい羽色をもつキジ類を鑑賞する文化があり、またその肉の美味さからの狩猟の伝統と相まって、養殖、放鳥がさかんに行われてきた歴史がある。そこではヤマドリさえも放鳥したという記録があるが、キジほどには容易に定着せず、まったく途絶えてしまっている。我が国でも、1973年代以降、それまで生息していなかった地域でヤマドリの放鳥が積極的に行われた。とくに佐渡島、淡路島、隠岐の島、小豆島といった島嶼によく放された。残念ながら放鳥された記録がしっかり残っている島はいいが、

本来そこに生息していたのかどうかさえわからない鳥もある。また、佐渡島では比較的定着状況がよく、狩猟で毎年捕獲もされている。一方、小豆島ではまだ定着していないという理由で、狩猟の解禁までには至っていない。佐渡島には、やはり外部から導入されたほ乳類の「テン」が高密度に生息し、在来種に対する脅威となっていると聞く。いまや全国民の関心の的となっているトキの自然界への復帰についても、営巣地の確保と同じようにテンによる捕食圧をいかに防げるかが問題になっているほどである。しかし、そこで立派に放鳥ヤマドリは生き残っており、着実に個体数を増やしているというのは、何とも不思議な現象と言わざるを得ない。栃木県でヤマドリの養殖個体に発信器をつけて、放鳥後の行動を追跡しているが、ほとんどの個体が放鳥後1ヶ月以内にタカやキツネなど捕食されていることが明らかになった。かろうじて生存している個体でも繁殖に関与している個体はほとんどいないという結果も出ている。自然に対して人間の取り得る方法というのはいかに無力かということを思い知らされる。その一方で、軽い気持ちで放してしまった動物が思ってもみないほど生態系を攪乱させてしまっている。あらためて人間の所作をしっかりと見つめ直す必要があるようだ。

というわけで、北海道に在住中は、寝ても覚めても「ヤブサメ」「ヤブサメ」と叫び続けていた男が、いまは「ヤマドリ」「ヤマドリ」とわめきちらして、職場の若い研究者があきれ顔で私を見る事態になった。偶然にも「ヤ」のつく鳥に心から心酔する結果となっているのは不思議な縁とつくづく思う。もしヤマドリに嫌われたら、今度は何にしよう? 「ヤマガラ」だろうか? 「ヤマゲラ」だろうか? しかしこの2種とも高いところに巣を作りそうだし...

当分は「ヤマドリ」とのつきあいは続きそうだ。

白化キレンジャク

札幌市南区 村上 トヨ

1月12日、主人に「すぐ近くにレンジャクの大群がいたよ」と教えられ、早速車に乗り込みました。南区石山6区の住宅地の電線に200羽ほどが休んでいました。それに100羽ほど合流しましたが、ほとんどヒレンジャクでお尻から糸を垂らしているものなど、美しく見事なものでした。

やがて他の群れが飛来しましたが、私の目は1羽の白い鳥に釘付け。初列風切はキレンジャク、顔はミコアイサ雌のようなチョコレート色、とにかく証拠写真を撮、とシャッターを切りましたが、5回切っただけで、飛び立ちました。その後しばらく待ちましたが、再び姿を見せませんでした。ヒレンジャクの大群と珍しいものを見た喜びと興奮で少々疲れて帰宅しました。

【広報部より】元のカラー写真では全身の色が薄くなっていることがわかり、不完全白化のうちの「色素過小」とみなされます。嘴先端が太く見えるのはナナマドの実をくわえているためです。



鵜川河口で希少3種

広 報 部

北海道ではもちろん、全国的にも記録が少ないアカアシチヨウゲンボウ、コモンシギ、コキアシシギの3種が2006年に鵜川河口周辺で確認され、むかわ町在住の愛護会会員である門村徳男さんから、観察記録、写真、コメントが寄せられました。若干の付記を添えて紹介します。

アカアシチヨウゲンボウ

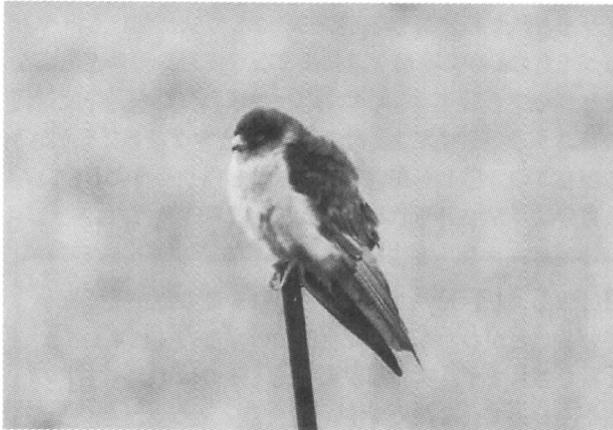
観察場所：鵜川河口左岸、汐見地区、堤防上から

滞 在 日：2006年5月23日から10日間くらい（時々観察）

撮影月日、時刻：5月24日、午前11時頃

コメント：23日も撮ったが電線にてバックがよくなかった。でも足はもっと赤く撮れていた。ウトナイ湖サンクチュアリネイチャーセンターに識別を仰いだ。

[付記] カラー写真では、足、眼の周囲、ろう膜（上嘴基部を覆う皮膚裸出部）の赤橙色が明瞭で、アカアシチヨウゲンボウの特徴がよく表れています。北海道ではこれまでに1985年の根室市、1988年の利尻島、1991年の浦幌町などの記録がありますが、合わせても数例程度と思われる。



アカアシチヨウゲンボウ

コモンシギ

観察場所：鵜川河口右岸の人工干潟

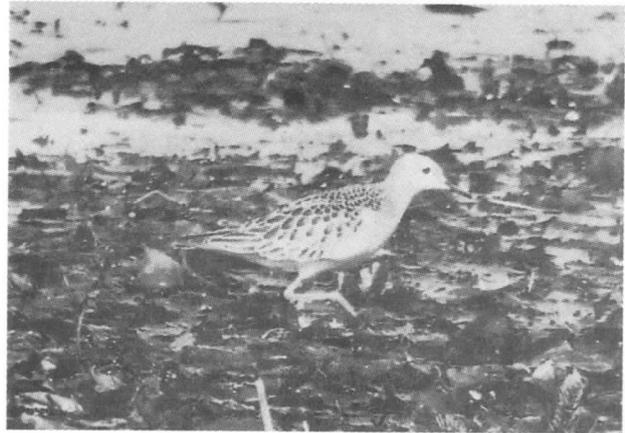
滞 在 日：2006年10月12日

撮影月日、時刻：同日午前10時頃

コメント：観察時間9時30分から10時30分の間、シギ・チドリ8種40羽中に見慣れないのが1羽いた。エリマキシギに似るが小型。何とか記録写真だけでもと思い、近くに来てくれることをじっと待った。数冊の図鑑を見比べながらだった。

[付記] 全身が黄褐色で、上面に黒い斑があること、足が黄色いこと、顔にこれといった模様がないことなど、カラー

写真ではコモンシギの特徴が読み取られます。これまでも1984年の根室市春国岱、1982年および1990年の鵜川河口、1998年の紋別市コムケ湖などの記録が残されていますが、なかなかお目にかかることのできないシギの一種です。



コモンシギ

コキアシシギ

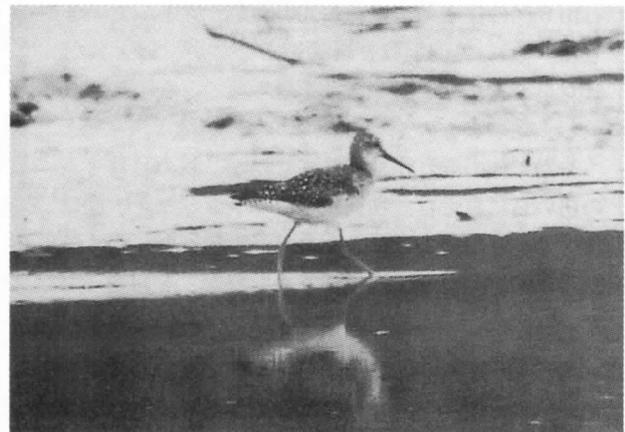
観察場所：鵜川河口右岸の人工干潟

滞 在 日：2006年10月4日から6日まで

撮影月日、時刻：10月4日午前9時頃

コメント：4日は午前7時から9時30分頃まで観察し、シギ・チドリ9種25羽中の1羽だった。見慣れない1羽、記録写真だけでも撮りたい一息で静かに待った。

[付記] 明瞭に黄色く細長い足、まっすぐ細い嘴など、カラー写真ではコキアシシギの特徴がよく伺われます。これまでに1979年8月の根室市春国岱、1980年9月の石狩市八幡、1994年8月の石狩市生振、1999年8月の浦幌町での記録などが残されていますが、コモンシギと同じく、めったに見られないシギの一つです。



コキアシシギ

環境調査における“耐震偽装”

美唄市 藤 卷 裕 蔵

2006年は耐震構造偽装が大きな社会問題になった。他の分野でも同じような問題がないのだろうか。

大きな公共事業などでは、法により環境影響評価が義務づけられている。ある事業における環境調査の縦覧資料を見て驚いたことがある。鳥類の調査結果についてであったが、北海道に分布していないはずの鳥が記録されている、一般に夏鳥とされている種が冬に記録されている、反対に冬鳥が夏に記録されている、という例が少なからずあった。本来北海道にいない種が観察されたり、冬鳥が夏に、夏鳥が冬に観察される例がまったくないわけではない。しかし、普通環境調査ではせいぜい年に数回の調査が行われるだけである。この程度の調査頻度で、上のような観察記録が得られるとしたら、まず調査結果の信頼性を疑わざるをえない。

最近、環境調査でも入札制で調査する会社が決まることが多い。そのため、北海道以外の業者が調査を担当する場合が増えてきている。多分、北海道での調査経験の

少ない人が調査するのであろうか、鳥の識別能力のかなりある人でも、道外での調査経験や思い込みから、いないはずの鳥を見た、または声を聞いたと勘違いするのかもしれない。

上に述べた環境影響評価書は、北海道の環境影響評価審査を通っているのである。建築物の耐震構造偽装問題では、設計した建築士にも責任があったが、申請書を審査する側にも偽装を見抜けなかった責任があった。環境調査の場合、調査者の方に悪意があったとは思えないが、その結果に基づいて報告書をまとめた調査会社、また評価書を審査する北海道に鳥類の分布に関して知識のある人がおらず、間違いを見抜けなかったのであろう。形式さえ整っていれば、内容をよく点検しなかったという点は、耐震構造偽装に共通するところである。自然環境を保全することを考慮して行われる環境影響評価がこのようなものだとすると、北海道の自然の将来が心配である。



野幌森林公園

2006.11.5

集合はしましたが、開始時刻頃から雷雨が激しくなり、安全のため中止としました。

ウトナイ湖

2006.11.12

天気予報どおり、強風、雨の悪天候となり、遠方からの参加者がいたものの中止としました。

野幌森林公園

2006.12.3 札幌市厚別区 真壁スズ子

2006年も最後のカレンダーになり、師走に入って最初の探鳥会で、冬に参加するのはもう7、8年位前になるのは。前日の夕方から降り続いた雪で森林公園は道も木々も真白でした。買ったばかりの長靴を履いて期待に胸躍らせながら出かけたものです。

家(新札幌)が近いのに様々な事が有ってなかなか参加することが出来ませんでした。本格的に参加させて頂いたのがこの年の7月位でしょうか。

今迄勤めていた会社も辞めてようやく一息ついたのがお盆を過ぎてからです。私が初めて森林公園へ行ったのが10年位前になります。友達に無理やり連れて行かれた大沢口で、木の上に鎮座しているフクロウを見たのです。まるで置物でも置いてあるように、その姿は遠くではありましたが、動物園のオリの中で飼われているのとは大違い。この鳥が世界共通の幸福を呼ぶ鳥なのだと、すごい興奮と感動を覚えたものです。

この度も探鳥会の始まる少し前にノスリと云う鳥を初めて見、羽を広げて飛んでいる姿は太陽の光を浴びて、薄い膜でも貼ってあるような猛きん類とは思えない位の繊細さに見えました(私の表現が間違いかも)。幸先の良い探鳥会の始まりです。

公園の中は葉が落ちてしまった木にも松にも昨夜の雪が綿帽子のように厚く積もっていましたが、冬空とは思えない位、真青な空、ときおり小鳥達が落とす雪が頭にかかり、見上げると顔にかかり、雪の洗礼を受けたものです。私の楽しみは何と云ってもフクロウです。今年は二羽と一緒に樹洞にいるのです(夫婦なのかな)。その可愛らしいこと、ずっと見ていたくらいでした。私にとってフクロウは今亡き友が私に贈ってくれた最大のプレゼントなのです。

探鳥会に参加させて頂くようになってから、鳥のサエズリに耳を傾けるようになり、夏場は路傍の小さな花にも目を止める様になりました。私にこの様な趣味が有ったなんて驚きです。

今では探鳥会に参加出来るのが大きな楽しみになって

いますが、いつまでたっても自分の好きな鳥、花しか覚え
ず、いつも会員の方々に聞いております。少しでも覚えら
れる様、努力はしているのですが(本当かな)、これから
も宜しくお願いします(この後二日に一度位はフクロウを
見に行っています)。

【記録された鳥】トビ、オジロワシ、フクロウ、コゲラ、
アカゲラ、ヤマゲラ、ヒヨドリ、キクイタダキ、ハシブト
ガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、
キバシリ、ウソ、ハシブトガラス 以上16種

【参加者】赤沼礼子、今村三枝子、梶本兼吉、川村宣子、
栗林宏三、黒澤 大、小山久一、後藤義民、品川睦生、白
澤昌彦、徳田恵美、田渕英幸、戸津高保、道場 優・信子、
中正憲信・弘子、成澤里美、橋爪陽子、畑 正輔、原 美
保、早坂泰夫、広木朋子、樋口孝城、前多輝明、真壁スズ
子、松原寛直・敏子、山本和昭、山本昌子、横山加奈子、
吉田慶子 以上32名

【担当幹事】白澤昌彦、道場 優

小 樽 港

2007. 1. 21 札幌市中央区 白澤 昌彦

小樽探鳥会は「私たちの探鳥会」—探鳥会30年の記録—
では、1976年(昭和51年)から始まっています。従って今
回は32回目の探鳥会となりました。探鳥会開始当初は「第
三埠頭から通船(筆者注:共同通船という船会社)の船で
海へ出ました」と探鳥会報告に記載されている。私は第3
回目に参加していますが、この時も船で港内を回ったのを
覚えています。昭和55年は船が出せないとのことで港周辺
を歩いて探鳥会をしたとの記録があり、昭和57年には祝津
で観察していることから、バスを利用し始めたことが伺わ
れます。その後、日本野鳥の会小樽支部にバスの手配等
をお世話になりながら、共催でやって来ており、昨年まで続
いておりましたが、幹事会で自前の貸切バスによる探鳥会
について検討を重ね、本年初めて当会単独で開催する運び
となりました。

今冬は正月から穏やかな日々が続き、雪も極めて少なく
この日は絶好の鳥見日和でした。道路も雪がなく順調に日
和山灯台に到着し、早々にハギマシコやヒヨドリの群れを
見つけ、いよいよ海鳥たちの観察。ウミガラスの冬羽をしっ
かりと見ることができ感激しました。次は祝津漁港でカモ
メの識別を楽しむ。高島漁港では、ハシブトウミガラス、
ハジロカイツブリ、シノリガモ、参加した小学生がつけた
イケメンことウミアイサなどをじっくりと楽しませてもら
う。晴天のため、光の具合が良く、非常に観察がし易かつ
た。昼食後のホームマックの駐車場からは、梅木幹事から情
報を事前にいただいた結果、圧巻のカンムリカイツブリを
見ることが出来、また、沖にはホオジロガモの群れを、そ

して山側ではレンジャクを楽しむことができました。

バスの中で鳥合わせをしたところ、参加者が45名もあつ
てか、過去最高の37種が確認され、独自の探鳥会としては、
素晴らしいスタートが切れたと思っています。バスの手配
をされた蒲澤幹事に感謝いたしたいと思います。

【記録された鳥】オオハム、ハジロカイツブリ、ミミカイ
ツブリ、アカエリカイツブリ、カンムリカイツブリ、ウミ
ウ、ヒメウ、マガモ、キンクロハジロ、ホシハジロ、スズ
ガモ、シノリガモ、ホオジロガモ、ウミアイサ、トビ、オ
ジロワシ、セグロカモメ、オオセグロカモメ、ワシカモメ、
シロカモメ、カモメ、ウミネコ、ウミガラス、ハシブトウ
ミガラス、ケイマフリ、ウミスズメ、ハクセキレイ、ヒヨ
ドリ、キレンジャク、ヒレンジャク、ツグミ、ハギマシコ、
スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ド
バト 以上37種

【参加者】赤沼礼子、阿部真美、白田 正、大島 武、大
町欽子、小野寺輝行、片山 實・慶子、蒲澤鉄太郎、木口
航、栗林宏三、河野美智子、小堀煇治、品川睦生、清水朋
子、白澤昌彦、高田征男、武沢和義、田中 洋・雅子、徳
田恵美、戸津高保・以知子、道場 優、中正憲信・弘子、
中島慶子、成澤里美、西川喜久世、浜野チエ子、濱野由美
子、原 美保、樋口孝城、平野規子、広木朋子、逸見敦子、
前田輝明、松原寛直・敏子、村上 峻、山田登志恵、山本
昌子、安真一郎、横山加奈子、吉中久子 以上45名

【担当幹事】蒲澤鉄太郎、白澤昌彦、中正憲信

野幌森林公園

2007. 2. 4 札幌市豊平区 高橋寿美子

朝、カーテンを開けると、生憎の雪……。しかも、時折
吹雪いています。野幌森林公園の探鳥会は、数年前の秋に
参加して以来なので、楽しみにしていました。冬は、鳥を
観察しやすいので、どんな鳥を見られるのか期待していま
した。主人と“行くだけ行ってみよう”と言う事になり、
いざ、野幌森林公園へ!厚別あたりから雪もやみ、空も少
し明るくなって来ました。現地に着くと、会の方が三人ほ
どおられ、“今日は、この天候なので、あまり期待出来な
いよ。歩くだけになるかも……”と言われ、全員で6名の
スタートとなりました(途中から1名加わりました)。大
沢口→大沢公園→カラマツコースを通り大沢口に戻って来
るコースです。わずかな希望を胸に、森林の中へと新雪を
踏みしめながら進んで行くと、あたり一面、白銀の世界!
参加者7名の足音と、時折り吹く風の音しか耳に入って来
ません。しばらく歩いて行くと、案内の方が、“ヤマゲラ
がいる!”と教えてくれました。私の中では、この冬見て
おきたい鳥の一つでした。双眼鏡でヤマゲラをとらえた私
は、しばらく、くいいる様に見つめていました。すると、

次から次へと鳥達が姿を現わしてくれた。木の幹と同じ様な色をした、キバシリ。口ばしが細くて少し曲っているのも良く見える事が出来ました。コゲラ、アカゲラの木をつつく音が、森の中に鳴り響きます。オオアカゲラまで現われましたが、双眼鏡でとらえる事は出来ませんでした。主人と私がエゾフクロウを見たいと言ったので途中、そのポイントまで案内して下さりましたが、生憎お留守の様でした。先日、二羽のエゾフクロウを多くのカメラマンが撮影していたそうです。人気者は、お疲れ様ですね。しばらくの間、エゾフクロウさんの留守宅を眺めて、御帰宅を待っていました。残念ながら姿を見せてくれませんでした。でも、この後小さな群れのマヒワ、つがいのウソにも出会えて感動しました！オスは、のどの所が赤くて、とてもきれいでした。この鳥も初めて見る事が出来ました。レンジャクの群も森林公園上空を美しく飛びかっっていました。吹雪からスタートした探鳥会でしたが、久しぶりに中身の濃い、そして自分達の双眼鏡でとらえる事が出来て、大きな収穫となりました。道のついてないコースを先頭に立って踏みつけて下さったり、図鑑を開いて親切に説明くださった会の皆さんに感謝しております。本当に有難うございました。

【記録された鳥】コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ヒヨドリ、レンジャクsp. ツグミ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、キバシリ、マヒワ、ウソ、ハシブトガラス 以上15種

【参加者】品川睦生、高橋俊博・寿美子、戸津高保、早坂泰夫、松原寛直・敏子 以上7名

【担当幹事】品川睦生、松原寛直

鳥民だより

◆ 総会のご案内

日 時：平成19年4月6日(金) 午後6時30分

場 所：かでの27 320会議室

総会終了後に懇親会を予定しております。会員の皆様、多数ご参加下さい。

◆ 野鳥写真展と写真募集のお知らせ

<野鳥写真展>

期 間：平成19年5月8日(火)～5月27日(火)

場 所：光映堂2階ギャラリー

札幌市中央区大通西4丁目

電話 011-261-0101

なお、展示作業は7日の午後5時30分から、撤去作業は27日の展示終了後から行う予定です。お手すきの方はご協力願います。

<写真募集>

写真は原則として道内で撮影したもので、サイズは四つ

切、デジタル写真はA4版。鳥の名前、撮影者、撮影年月、撮影場所を添付して下さい。送付は光映堂の小林店長まで。5月7日に直接持参する場合は事前に連絡願います。出展者には光映堂の本店と地下街店で使える商品券(2,000円分)を進呈します。

問い合わせは小堀煌治

011-591-2863 (午後7時～10時)

◆ 平成19年度会費納入のお願い

この号(第147号)と一緒に郵便振替用紙を入れてあります。速やかな会費納入をお願いします。

◆ 訂 正

前号(第146号)の7ページ右段の写真説明「チゴモズ 2006. 5. 7 札文島香深(香深井地区)」の年月日は、2006. 5. 9 の誤りでした。お詫びして訂正します。

宿泊探鳥会のお知らせ

5月の天売・焼尻、島めぐり

昨年は利尻・札文島で大好評でした。それをうけて、今回も「島」です。焼尻島は現地で鳥類標識調査をしている有田智彦さん、天売島は写真家の寺沢毅さんにガイドをお願いしました。

月 日 5月3日(木)～5日(土)

集合場所 札幌市中央区大通3丁目
道新ビル前(大通り側)

集合時刻 3日午前6時50分

札幌帰着 5日午後6時頃

定 員 40名

参 加 費 3万6千円

(交通、宿泊、食事などすべて込み)

申込み先 蒲澤会計幹事

電話 011-663-9783

4月1日午前9時から電話で受付、定員になり次第締め切ります

以下は日程と宿泊です。日中はもちろん、早朝も夜も探鳥をします。

1日目(5/3) 7:10 札幌発

羽幌発11:40のフェリーで焼尻島へ

布目旅館(電話 01648-2-3311)泊

2日目(5/4)

焼尻島発 9:40のフェリーで天売島へ

ホテル大一(電話 01648-3-5111)泊

3日目(5/5) 13:20 天売島発



- **新企画** モエレ沼探鳥会(4月8日)を初めて開催します。是非ご参加下さい。
- **変更** 千歳川探鳥会の集合時刻が「午前9時」になりました。ご注意下さい。

- ☀ 探鳥会は、悪天候でない限り開催します。
- ☁ 昼食、双眼鏡などの観察用具、筆記具、野鳥図鑑などをご持参ください。
(融雪期や雨天の時は、防寒衣、雨具、長靴などを用意してください。)
- ☂ 公共交通機関を利用される場合には、事前に時間などをお確かめください。
- ☆ 探鳥会の問い合わせ

(社)北海道自然保護協会 ☎011-251-5465 午前10時～午後4時(土・日祭日を除く)

開催日	探 鳥 地	集合場所及び集合時刻
4月8日(日)	モエレ沼	ガラスのピラミッド前、午前9時30分
	地下鉄東豊線環状通東駅から中央バス北札苗線東69番・東79番、モエレ公園東口下車徒歩15分。ここでは初めての探鳥会です。沼の水鳥群、沼畔湿地草原の鳥、林のカラ類など盛りだくさん。	
4月22日(日)	宮島沼	湖畔、午前10時
	JR岩見沢駅前発、又はJR石狩月形駅前発、中央バス(月形行又は岩見沢行)「大富農協前」下車、徒歩10分。マガンたちは北帰途中宮島沼に集結。湖面で羽を休め、えさ場を行き来する姿は壮観です。	
4月29日(日)	野幌森林公園	大沢口、午前9時
	JR新札幌駅発 夕鉄バス「大沢公園入口」下車、JRバス「文京台南町」下車、徒歩各5分。芽吹きが進み、夏鳥たちがほほ揃って、森が生き生きとしてきました。深呼吸をしながら進みます。	
5月3～5日(木～土)	天売島・焼尻島(宿泊探鳥会)	本号の13ページ参照
	好評だった昨年の利尻・礼文に引き続き、今年も自然環境の異なる二つの島を訪れます。	
5月6日(日)	藤の沢	白鳥園、午前9時
	定鉄バス札幌駅発又は地下鉄真駒内駅発(定山溪行又は豊滝行)、「藤野3条2丁目」下車、徒歩10分。水辺もあって、どんな鳥が現れるか期待しながら、白鳥園の裏山(藤野マナスル)を巡ります。	
5月13日(日)	千歳川	さけますふ化場手前の橋付近の広場、午前9時
	交通機関はありません。自家用車の相乗り希望の方は幹事に相談してください。千歳川沿い道は自然の宝庫。水辺の鳥、草原の鳥、林の鳥もと欲張って、ゆっくりあるきましょう。	
5月20日(日)	野幌森林公園	大沢口、午前9時
	交通機関は、4月29日の案内を参照してください。夏鳥が勢揃い。木の間に見え隠れするキビタキや、梢でさえざるオオルリなど魅力いっぱいです。	
5月27日(日)	鶴川河口	鶴川温泉四季の館 駐車場、午前9時30分
	札幌駅又は地下鉄大谷地駅発、道南バス浦河行(ペガサス号)、「四季の館」前下車。鶴川河口の広々とした環境が魅力です。人口干潟のシギ・チドリや草原の鳥、また猛禽類が探しどころ。	
6月3日(日)	植苗ウトナイ	JR千歳線植苗駅、午前9時10分
	JR千歳線 植苗駅下車。風が運ぶ草原の鳥の囀りを聞きながら湖畔へ向かいます。餌を運ぶ親鳥や、オオジシギのフライトも期待です。	
6月9日(日)	平和の滝(夜の探鳥会)	平和の滝駐車場、午後6時30分
	地下鉄琴似駅発、JRバス(西野平和線) 平和の滝入口下車、徒歩20分。ヨタカ、コノハズクなどの声、遅くまで鳴くツツドリなど、夜ならではの探鳥です。懐中電灯、防寒衣、防虫薬の用意を。	
6月17日(日)	東米里	東米里小中学校正門、午前9時
	地下鉄菊水駅発、JRバス「東米里小学校前」下車。草地は少なくなりましたが、草原の鳥たちはやってきます。カッコウ、コヨシキリ、エゾセンニュウなどがにぎやかです。	
6月24日(日)	野幌森林公園	大沢口、午前9時
	交通機関は、4月29日の案内を参照してください。鳥たちにとって一番忙しい、子育ての季節です。初夏の花たちも咲きそろい、目移りしそうです。	

[北海道野鳥愛護会] 年会費 個人2,000円、家族3,000円(会計年度4月より) 郵便振替 02710-5-18287
 〒060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・六階 北海道自然保護協会気付 ☎(011)251-5465
 HPのアドレス <http://homepage2.nifty.com/aigokai/>